

國學院大學學術情報リポジトリ

・第2回 高野奈未氏「古典注釈学と国学：
賀茂真淵を中心として」概要

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000571

令和元年度第2回国学研究プラットフォーム公開レクチャー 高野奈未氏「古典注釈学と国学—賀茂真淵を中心として」概要

2019年度第2回国学研究プラットフォーム公開レクチャーは、日本文学の領域から賀茂真淵を研究している高野奈未氏により、「古典注釈学と国学—賀茂真淵を中心として」というテーマで開催された。

高野氏はまず、国学研究における真淵についての言及、そして真淵の古典注釈学の特徴について例示した。高野氏によると、一般的な国学研究では国学の目的として社会改革や生き方の探求というものがあり、その手段として古典研究が行われてきたという認識があるといい、真淵については古道の追究が不十分であるという評価がなされており、古典の研究を通して古道の究明に至ったという点で本居宣長を国学のピークとするという現状があるという。また国学研究における真淵についての言及の例としては、日野龍夫氏が国学のピークを真淵に移し替え、真淵の国学を「ほどよい完成」、宣長の国学を「行き過ぎの無理が見られる」状態であると考えて、宣長ほどの完成度ではないという点に真淵の国学の有用性を見出すことができると提唱したという（『近世文芸思潮研究』『日野龍夫著作集』2、ペリかん社、2005年）。さらに真淵の古典注釈学の特徴については鈴木健一氏が、契沖が「用例を引いてきて、機能的な解析」を行ったのに対し、真淵の古典注釈は「心情を重視して、感動のありかを示した」ものであると指摘したという（『古典注釈入門』岩波書店、2014年）。これを踏まえて高野氏は、心情分析とある程度の実証性を備えた真淵の古典注釈は国学や古典注釈学に先立つものであると述べ、国学研究の立場から真淵を検討

する場合は宣長や荻生徂徠、平田篤胤との思想の比較が中心となるのに対し、古典注釈学は先行の古注釈との比較が主であり、真淵の学問の特徴を明らかにするのに有効であると説明した。

続いて、高野氏のこれまでの研究により明らかとなった真淵の古典注釈の特徴が紹介された。例えば『伊勢物語』の旧注では本書を在原業平における実際の出来事として捉え、儒教的倫理観にもとづき好色的要素を否定し教訓性を付与しており、また旧注において事実として受け取るべきでないと言われた部分は「作物がたり」、即ち虚構として読んだうえでそこに教訓を読み取るよう指示されるなど、『伊勢物語』を理想的に読むことが求められていたという。

一方真淵による『伊勢物語』の注釈書である『伊勢物語古意』では、上記のような虚構性を「興」として理解し肯定する旨が説かれているという。この「興」という語は流布本『伊勢物語』の奥書にあり、在原業平の自記により『伊勢物語』が成立したという説の根拠となっていた語であったのだが、真淵は物語においては元々の物語そのものよりもその感興を喚起する表現方法をこそ賞賛すべきと主張した。真淵における「興」の用法は一概に定義はできないものの、旧注を覆し本文を無垢に読んでいくための方便として用いられており、真淵は『伊勢物語』を業平の自記とする根拠であった「興」を物語の作者による創作の特徴として位置づけ、書かれたことをそのまま読むということを主張する理念的枠組みとして利用していたという。なお荷田春

満の『伊勢物語童子問』においても『伊勢物語』の虚構性が強調されているが、本書は旧注の批判に終始してしまっていた。しかし『伊勢物語古意』は『伊勢物語童子問』による虚構性の強調を引き継ぎつつ、新たに『伊勢物語』の理解方法を提示することに成功したという。

続いて『伊勢物語古意』が前期読み本に方法的影響を与えていた例が紹介された。真淵は『伊勢物語』において歌に地の文を付け加えるとその歌の意が変わることに注目していたが、この視点が建部綾足にも影響を与えていたことが奥野美友紀氏の研究により明らかになったという（『本朝水滸伝』論—近世的歌物語の創造『江戸文学』22、2001年、同「虚構の発想—建部綾足『由良物語』の割注から』『日本文学』55-12、2006年）。また綾足は『西山物語』にて「ひをり（割注：伊勢物語）」の語の横に「柵」の字を振っているが、これは『伊勢物語古意』における「ひをり」への「引柵又は標柵」という注を参酌しているという。

次に、真淵による『源氏物語』への注釈書である『源氏物語新釈』の解説がなされた。本書は『伊勢物語古意』と同様に前代の注釈や価値観の一部を踏襲しており、同時代の人々に受け入れられやすくなながらも人間像についての新説や読解を通して明らかにした物語の創作法を提示しているという。真淵以前の注釈においては『源氏物語』は寓言や勧善懲悪の物語として位置づけられており、真淵も『源氏物語』にそうした構想や実利性を見出すことについては否定していない。しかし真淵は、「物のまぎれ」は宮中の規範が乱れ人々が人情に通じていなかったために発生したとしており、人情の重視という点に真淵の独自性が見られるという。また光源氏と藤壺の関係については、もともと皇子と皇女の配偶であり「日本の神教」によって諷諭しているとし、皇統の純血が守られていることを

重要視しているという。すなわち真淵は皇権を重んじ漢学の無用さや人情の大切さを学ぶことができる物語として『源氏物語』を認識しており、現代的な理解において「もののあはれ」が実現されているからよいという見方とは大きく異なるという。また真淵は『伊勢物語』をより詳述したものとして『源氏物語』を捉えており、説明が過剰であると非難はしているものの『伊勢物語』の趣意を明らかにする助けになると限定的に肯定していることも解説された。

最後に高野氏の今後の課題として、国学者の物語注釈における教訓性についての検討が挙げられた。特に真淵は『歌意考』において『落窪物語』を「ことのこゝろをよくかきたるは、ものかたりの中に又たくひなし」と高く評価しており、真淵による『落窪物語』への注釈は教訓性が強調されているという一般認識について再検討を加えたい旨が述べられた。

その後、質疑応答の時間が設けられた。日野龍夫氏が提示した真淵と宣長の関係性についての位置づけについては、現在では真淵の宣長への寄与はそこまで大きく評価しない向きがあると回答した。続いて真淵の「興」の概念が、文体が与える効果を重視した結果生み出されたものなのかという質問に対しては、旧注を否定するために見つけ出した可能性があると回答した。

（武田幸也・鈴木健多郎）